



# 正しい姿勢・正しいやり方

長い夏休みも終わり新学期が始まったが、なかなかやる気が起きず、ダラダラ過ごしている人も多いと思う。正直、まだ暑い日々も続いているのでだらけてしまうのもわかる。しかし、このままダラダラ過ごしていると、あつという間に定期テストを迎え、結果も惨たんたるものになるだろう。そこで、今回はこれから行われる定期テストについて話していきたいと思う。

多くの生徒は、学校の部活が停止するテスト一週間前から、テスト勉強として学校から課題で出されるワークに取り組む。しかし、この方法はあまり効果的ではない。なぜなら、時間が足りないからである。そもそも、学校から出される定期テストの課題は、一週間で終わるような少ない量ではない。また、仮に集中して一週間で課題を終わらせたとしても、それはただ課題を終わらせただけで、本来の目的である「問題が解ける」ようになっただけではない。正直、人間は一回で多くのことを吸収することができないからである。だから、何度も、繰り返し問題を解くのが一番良いのだが、実際、一週間では繰り返し問題を解くのは不可能である。やはり時間が足りないのである。だから、創学舎では一ヶ月前からテスト勉強するように指導している。

では、一か月前からやれば良いかというと、そういうわけでもない。ただ闇雲にやっても、意味がないからだ。私は十数年前にダーツに出会い、暫く独

学で練習していた。初めのうちは、順調に練習の成果が出ていたが、ある時期を境に練習しても全く変化が見られなくなった。

試行錯誤して様々な練習方法を試みたが、どれもあまり効果は得られなかった。そこで、ダーツのインストラクターに相談したところ、なんとダーツには正しい投げ方・練習の仕方があったのだ。私は、今まで独学で練習してきた。だから、ある程度までは上達したのだが、それ以上を目指す場合は、体の構造を踏まえた正しいフォームで投げないと上手くならないとのことだった。そこで初めて私は、正しい姿勢・やり方の重要性を学んだ。



これは定期テストにも通じる。定期テストにも正しい姿勢・やり方は存在するのだ。その方法は、各教室で配布されている冊子にあるとおりだ。初めのうちは、慣れないことが多いと思うが、これが正しいやり方だと信じて、このあと控えている定期テストに取り組んでもらいたい。そして、少しでも良いから、前回よりも好成绩を残してもらいたい。

(矢上)

# あいつ

私は小学校から大学までずっと野球部に所属していました。

学んだことも多く、素晴らしい思い出もたくさんあります。

さて、ここで質問。みなさんは何のために部活をやっていますか。

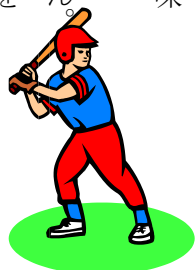
毎日、部活の厳しい練習に汗を流していること

でしょう。しかし、それがみなさんの人生にどうプラスになるのか考えたことがありますか。

たとえば、その野球少年。一生野球だけやって生きていける人なんて極々まれ。宝くじを当てるより難しいかもしれません。野球少年の99%は大人になったら野球から離れ、ごく普通の社会人として働くことになりま。社会に出たら野球の上手い下手なんて話のネタくらいにしかありません。140キロのストリートが投げられるからと言って就活がうまくいくわけではないし、甲子園に出場したからって給料は上がりません。つまり、どんなに野球が上手くなっても、どんなに勝ち進んでも、プロ野球選手にでもならない限り、大した意味はないのです。

では、部活には何の意味もないのか。

そんなことはありません。私は部活を通して、野球を教材にして、多くのことを学んできました。その中の一つに、「当たり前前」のことを当たり前にする。この大切さというものがあります。



野球の強豪校、伝統校と呼ばれる学校は例外なくこれが出来ていました。野球のプレーにおいてもちろんそうですが、それ以外の「挨拶」「返事」「整理整頓」がとにかく素晴らしい。大きな声でハキハキ挨拶し、キレのある返事をする姿は敵ながら憧れを抱きました。それから、いま思い返すと、部室のトイレの綺麗さと、そのチームの強さは比例していたように思います。

ここまで野球を例に挙げて話してきましたが、これは他のどの部活にも当てはまるはずですが、「挨拶」「返事」「整理整頓」といった当たり前前

ことが当たり前前に出来ているチームは強いし、それらがきちんとできる人は部活を離れてからも、どこに行っても評価されます。こういった力をつけることこそが部活をやる意味なのではないかと私は考えています。

創学舎に通ってくれているみなさんの中にも部活を頑張っている人がたくさんいます。あなたの挨拶は、返事はどうですか。机の上は、カバンの中は整理整頓されていますか。

振り返ってみよう。もし出来ていなかったら、変えていこう。みなさんの手本になれるよう、私も毎日元気100%の挨拶をしていきます。みなさんも元気いっぱい挨拶を返してくださいね。

(高寺)

# 子育て奮闘記④

今月、我が家の長女が十歳の誕生日を迎える。つまり、私も父親歴十年ということになる。あつという間の十年間。誕生日が近づくと、自然とこれまでの子どもの成長を振り返っている自分がいる。

長女が生まれた時、外は大雨の中誕生、翌日には熱を出し、母子同室にできなかったこと。妻と一緒に退院できないかもしれないと言われたこと。産婦人科でガラス越しにしか、娘を見られなかったこと。退院当日、やつと熱が下がり、一緒に退院できると聞き迎えに行った。初めて抱っこしたあまりにも小さい娘。そんな娘が、今や小学四年生。体格もよく、さほど妻と変わらぬほどに成長した娘。本当にあつという間の十年間、自分

も年をとったなあ、なんて思う。実は、この十年間続けてきたことがある。それは、娘の誕生日には年の数だけ花をプレゼントすることだ。

一歳の誕生日には一本のバラから始まり、二歳には二本、三歳の時には娘を連れて花屋へ行き、娘自身に選ばせたことを思い出す。娘はバラではなく別の花を三種類選び、その花で花束を作ってもらった。そういえばその際、年の数だけ花の数としたかったため、余った花を花屋さんが別に包んでくれた。それを娘が妻に渡すと、「私には余りなの？」なんて冗談で言われたことを思い出す。



歳を重ねるごとに、花の本数が増えていく。近頃はもう立派な花束になってきた。そして、今年も十本。どんな花束を娘は喜んでくれるだろうか。そういえば去年、九本の花束を選んだ際、妻と話したことを思い出す。「何歳までパパの花束を喜んでくれるのだろうか?」

外見も中身も、女の子から女性になりつつある娘。長男や次女とは違い、もう無条件で「パパー!」と抱きついてくれることは少なくなった。平日、小学生二人(長女、長男)が登校した後起きることの多い私は、小学生二人の起きてくる顔はなかなか見ることが出来ない。

だが、土日の出勤前には、玄関で見送ってくれる長女。学童の当番には、ママじゃなくて、パパがいい、といってくる長女。たまの平日休みには、私が学童に迎えに行くことを喜んでくれる長女。飛びついてきてくれることは減り、少し寂しい気もするが、きつと成長している証なのだろう。

今年の花束は喜んでくれるだろうか。一体何歳まで喜んでくれるのだろうか。そして私からの花束を喜ばなくなった頃、私に代わる誰かが娘を喜ばせてくれるのだろうか、なんて考えると、正直なんだか切ない気分になってしまう。

子どもの成長は喜ばしい反面、いつかは自分の元を離れていくときがくる、と寂しい気分にもさせる。不思議な感覚だ。

今月は長女の十本の花束。来月には次女の三本の花束も用意しなければ。保育園の影響か、おしやべりが上手になってきた次女。二人揃って「きれいなね」ときつと喜んでくれるに違いない。そう信じて、今年も花束を用意しよう。(森)

### ひゅーひゅー

●「大丈夫か?がんばれ。」「もう少しだ。」「ひゅーひゅー。冷たい風がほほを刺す。手がかじかむ。「しつかりしろ。もうちょっとだ。」「ひゅーひゅー。激しい痛みで薄れゆく意識のなか、きつとぼくは幸福だった。大きくて温かい母の背中。母はぼくを背負って走る、走る。ひゅーひゅー。「しつかりしろ……。」「ひゅーひゅー……。」

●三歳だったか、いや四歳のときかもしれない。突然の腹痛がぼくをおそった。「痛いよー、痛いよー。」と泣きわめくぼくを母は抱きかかえ、背負うと走り始めた。どこに行くのかは知らなかった。痛みはどんどん強くなる。泣きじゃくるぼくを背に、母は走った。速い、速い。母ちゃんがんばれ。もつと走って。痛みを耐えながら、どこか楽しかった。うれしかった。速いぞ。ひゅーひゅー……。

●気がつくとうす暗い部屋の中にいた。冷たくて固いベッドの上に横たわっていた。一人の老人の顔が目に入った。そのとなりに若い娘さんの顔。そして母の顔。今までかいだことのない不思議な臭いに満ちていた。(きつとあれはアルコールだったのだ。)天井がやけに高く、真っ白で、そういえば、壁も真っ白だった。ふと気がつくとお腹を触られていた。ゆっくり、なでるように入ろんな所を動く。この手はやさしいな。誰の手だろう……。またぼくは眠っていた。

●「さあもう大丈夫。」「また、何かあったらおいで。」「老人がはりのある声でいった。何であの声をおぼえているのだろうか。「よかったね。ぼうや。」「若い娘さんがほほえみかける。母の背中にもどつたぼくは、ペコリとおじぎをした。「ありがとうございませう。ありがとうございます。」「母は何度も頭を下げていた。

●それから、母はぼくを背負って家路についた。夕暮れ時で、ぼくが一番美しいと思っている海岸線にお日様が沈もうとしていた。ゆらりゆらり……。母の背はやっぱり大きく暖かかった。また、ぼくは幸せだった。ゆらりゆらり……。夕焼けがきれいだな……。



●母が九〇歳を越えた。足もめつきり弱くなり、それなりの心の準備をしなければと思いつつ、母は遠く離れた故郷にいたので、ついくじけてしまふ。そんな日々の中で、突然思い出すことが増えた。母の思い出だ。今まで、そのかけらも浮かば

なかったことがよみがえる。母が私を背負って走った日のこともそうだ(因みにあの薄暗い部屋は、村に一軒の病院で、老人は名医であったと後に知った)。

●母との思い出は尽きないが、やはり私の病気に関することが多い。小一〜中三まで闘病生活を送ったことは、前にどこかで書いたが、ずいぶん心配をかけたと思う。といつても入院していたのは、合計でも一〇日程度で、普通の生活を送れたから、幸いではあった。とにかく九年間、朝昼晩と薬を飲み続け、月に一回かかりつけの医者に行き(この医者も名医であった)、半年に一回大病院に行く。私の子供は二人ともすでに社会人で、病気の時はずい分と心配したが、まあ大過なく成長してくれた。それと比べれば、母の心労はどれ程のものであったのか、想像もできない。私は自分の病について、悩み、苦しむことはそれほどなかったが、死の予感の子供ながらにかすかにあって、それがおかしいとかは思わず、自分の中の自然な感覚だった。病院、特に大病院に行くことは、そのかすかな予感が少し強くなる機会であり、一方で、早朝に家を出て深夜に帰る日程で、これは母と私の小旅行であった。その日だけ、食堂でごはんを食べたり、ずつとお話をしたり、楽しい日でもあった。

●こうやって書いてみると、また突然思い出すことが出てきて、これは筆は尽きないが、また別の時に。(小林)



▼▲継続希望の方へ▲▼  
▶退塾や転校等で創学舎を離れた方にも、ご希望があれば創学舎ニュースを無料でお送り致します。  
▶在籍していた教室までご連絡ください。